



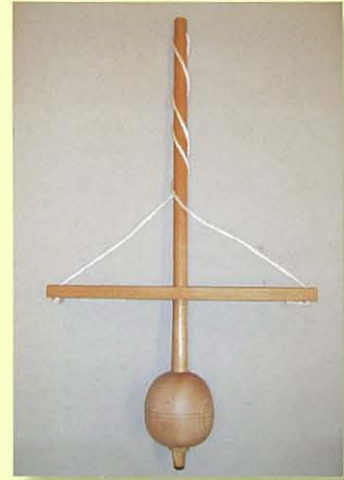
こども歴史なぜなに? 相談室



昔はどうやって火をつけていたの?

みなさんは生活の中で火をつけることがありますか? マッチやライターを使うのは、夏休みに花火時やキャンプをする時くらい、日ごろはコンロもお風呂もガスでつけているという人が多いのではないのでしょうか。いやいや、クッキングヒーターや電気温水器を使っている家では、「火」そのものを見ることがなくなっています。そう言えば仏壇のろうソクも、近ごろは火事を起こさないように電気のが売られていますね。

今の私たちにとって、火をつけることは簡単にできます。しかし、マッチもライターもない昔は、火をつけることはとても大変なことでした。昔の火のつけ方としては、木の板に木の棒をキリのようにこすりつける方法を思い浮かべる人が多いと思います。これは「キリモミ法」と呼ばれ、いつ始まったのかわからないほど大昔から行われている方法です。しか



意外に歴史が浅い「マイギリ法」



復元展示の火打ち石と火打ち鎌

し、手の力だけで火をつけるのは大変なので、棒にヒモを巻きつけて回転させる「ヒモギリ法」や、回転する道具を使う「マイギリ法」などが生まれました。ただし、「マイギリ法」は江戸時代に神社の儀式などで使われていましたが、それ以前の時代に使われていたかはあやしいようです。なお、木も火が付きやすい種類と付きにくい種類があり、何でもいというわけではありません。また、火打ち石や火打ち鎌を打ちつけて火花を散らす方法も、古墳時代ごろから行われていました。

しかし、どの方法にしても最初から火が燃えあがるわけではありません。最初につくのは、線香の灯りのような小さな火種です。それを燃えあがらせるまでが、また一苦労です。このように昔は火をつけることが大変だったので、一度ついた火種は消えないように守られていました。

広島県立歴史博物館では毎年8月に、こども博物館教室で「ヒモギリ法」による火おこしの体験をおこなっています。みなさんも今年の夏休みは火おこしで汗をかいて、昔の人々の苦労を体験してみませんか?



体験教室「中世の灯りと火おこし」